

油山の宝物さがし ～いにしへの 柏原の製鉄～

現在、市の歴史や自然環境についてまとめた「新修 福岡市史」が刊行中です。編纂の中でうかびあがった話題は講演会、広報誌「市史だより」等でも取り上げられています。「市史だより F u k u o k a 14 号」の特集「歴史の郷 柏原に行く」では、いにしへの森と人のかかわりが描かれていますのでご紹介します。

◆ 柏原で鉄づくりをしたころ

樋井川に面する柏原小学校。このそばの丘陵の一角で、古代、鉄の精錬・鍛冶を行った遺跡が見つかっています。敷地内の活動は6世紀後半（推古天皇のころ）から10世紀（菅原道真のころ）まで300年の長さに及んでいます。飛鳥時代、奈良時代、平安時代初期の期間にあたります。

◆ 製鉄に必要な森

鉄をつくるには、高温を発生する木炭を大量に必要としました。よって山林の管理、木の伐採・運搬、炭焼きの作業が鉄づくりに伴うことになります。油山に近い柏原は木炭を調達するのに適していたのでしょう。

また遺跡からは「山守家」と書かれた9世紀ころの土器が見つかり、山林管理に関する職または氏族が存在したと考えられています。製鉄遺跡に伴って山の管理を示す文字資料が確認されたのは大変まれな例とのこと。



《福岡市史のHPで閲覧できます》

◆ 森林の利用

江戸時代の福岡の山林についての展示が昨夏、福岡市博物館で開催され、はげ山の多さが示されました。古代の製鉄においても管理の努力はされつつも、過剰に山林が利用されたと思われます。今、私たちの目の前にあるのは産業や暮らしに利用されない森。伐採した木を今の時代にあったように利用していか、少しずつ考えていけるといいな、と思います。（柴戸）

※日本の製鉄について「新版 図説日本の文化をさぐる 日本の鉄」「同 鉄の文化」窪田蔵郎 小峰書店 福岡市総合図書館蔵